

# 「らしい」と「ようだ」の用法について

周 瑛 英

## 1 はじめに

### (1) (コンビニで店員と常連さんの会話)

店員：いらっしゃいませ。

常連：今日は暑いね。

店員：そうですね。でも、木曜日から二日間雨ですよ。

常連：木曜日雨が降るの。

店員：携帯の天気予報によると、今週の木曜と金曜は雨が降るらしい。

常連：変なお天気。

店員：雨が降ると、また気温が下がったりするから、体に気を付けてくださいね。

常連：ありがとう。

(実例)

日常会話において、以上のように「らしい」の伝聞・推量を表す形式には、話し手の「何らかの配慮」<sup>註1</sup>があり、自分の発話に対する責任を回避する用法が頻繁に見られる。しかし、ドラマや小説など、あるいは座談、対談およびインタビューには用例がみつからなかった。それは、話し手は責任を持って発言しなければならない場面では、「らしい」の責任回避用法はできないはずであると考えられるからである。

また、人間関係と場面において、話内容や「誰」に向ける話かによって、「らしい」の責任回避用法の働きが変化することを明らかにする。つまり、責任回避用法から人間関係を維持する用法が派生するのである。本研究では、実際の生活の中に生じる実例を用い、人間関係と具体的な場面を設定し、分析を行う。

「らしい」の責任回避用法で、聞き手に「ある具体的な情報に基づいて」の発言であり、情報の真偽について、話し手しか分からなく、重視されていないことであると考えられる。「らしい」は「強く押したい」<sup>註2</sup> という機能があり、聞き手に「ある具体的な情報に基づいて」という注意を促す信号を強く出すことによ

て、話し手が責任回避用法を実現することができるのである。

また、「ようだ」の断定回避は、自分の配慮及び相手に配慮することに基づき、発話内容をはっきりせず、はっきり言えず、「あまり強調しない」<sup>23</sup> という機能が働くことができると考えられる。従って、「ようだ」の責任回避用法は、断定回避を通し、結果的に責任回避用法が実現できることを明らかにする。

## 2 「ようだ」と「らしい」の意味・用法の違いについての 先行研究

「話し手の観察結果を述べる『ようだ』は、観察されたことを証拠として未知のことを推定する用法も有しており、その場合、『らしい』にかなり近い意味になる。」(『新日本語文法選書4 モダリティ』) 推定用法<sup>24</sup>、伝聞用法の「らしい」は、「ようだ」に置き換えることができる。ただし、「ようだ」を用いると、単なる文ではなく、入手した情報を話し手がどのように捉えたかということ述べているニュアンスが強くなる。(『現代日本語文法第8部 モダリティ』) つまり、「ようだ」と「らしい」の差異は、ニュアンスの問題になり、これについて、話し手との事態の心理的距離(「ひきよせ」の態度をとる場合は「ようだ」、「ひきはなし」の態度をとる場合は「らしい」)(早津 1988) や、観察対象と判断内容の距離(近いと捉えればヨウダ、遠いと捉えればラシイ。)(菊地 2000) の相違として説明する見解が提出されている。

### 2.1 早津(1988)における「らしい」と「ようだ」

早津(1988)は、推量表現に用いられる「らしい」と「ようだ」の意味・用法の違いについて、「情報」(「間接的情報」と「直接的情報」)と「心的態度」(「ひきよせ」の態度と「ひきはなし」の態度)に基づき、事態を自己の領域の外側のものとしてとらえようとする場合には「らしい」が用いられ、自己の領域の内側のものとしてとらえようとする場合には「ようだ」が用いられると述べている。

#### 2.1.1 「らしい」

##### 1. 間接的情報を根拠にした「らしい」

第一に、ある事態に対して、その真偽を自身で確かめたわけでないが何らかの間接的情報に基づいて、おそらく事実とみとめるのが自然であろう、そう考えるのが妥当であろう、と判断する場合である。

第二に、普通には個人のレベルで直接に経験したりその真偽を確かめたりする

ことができない事態に対して判断を下す場合がある。

## 2. 直接的情報の“ひきはなし”による「らしい」

第一に、他者の心理状態などにかかわる判断の場合がある。他者の心理状態に対する推量は、たとえその根拠が発話主体が直接捉えた状態であろうとも、一定の距離をおいた物となりやすい。なぜなら、人の外面に現れる表情や態度は必ずしもその人の心理状態を反映してはいないからである。

第二に、自分自身の状態に対する判断においても「らしい」が使われることがある。自らの状態に対する判断は、「ようだ」を用いて「どうも風邪をひいたようだ」のように表現することが多い。しかし、判断の対象となる自分を、判断する自分とは別個の独立の存在として冷静にとらえようという意識がはたらく場合には「らしい」が用いられる。

第三に、自分の抱いた感情や感想などをより普遍的なものとしてとらえようとする意識がはたらく場合にも「らしい」がもちいられる。

第四に、判断に対する責任の所在をはっきりさせないためや責任を回避するために「らしい」が用いられることがある。

### 2.1.2 「ようだ」

#### 1. 直接的情報を根拠にした「ようだ」

第一に、発話主体が実際に経験した、あるいは現に経験している事態に対して、直接的情報に基づいて、おそらく自分の判断は正しいだろうと判断する場合である。

第二に、発話主体が自らの視覚、聴覚、触覚などによって得た感覚的な情報に基づいて、ある事態がその場においてそうとらえうる状態だと感じられる、十分な確信があるわけではないが自分にはそう思われる、と判断を下す場合の用いられ方がある。

#### 2. 間接的情報の“ひきよせ”による「ようだ」

第一は、新聞記事や書物の記載などを根拠にした判断であるが「ようだ」が用いられている。判断の根拠は間接的情報などだが、判断の対象となる事態を自分に身近なものとして、自分の心情に触れる物として、あるいは(学問上などで)自分に近い立場のものとしてとらえているのである。

第二は、「ようだ」を使うことによって記事に臨場感がでていいる。専門家でない新聞記者によって書かれたものであるから「らしい」がふさわしいのだろうが、専門家が述べるとしたら「ようだ」を用いる。判断の根拠とする情報の直接性・

間接性はもはや問題ではなく、“ひきよせ”の心理が働いていることが「ようだ」を用いる大きな要因と言えるだろう。

つまり、事態を自己の領域の外側のものとしてとらえようとする場合には「らしい」が用いられ、自己の領域の内側のものとしてとらえようとする場合には「ようだ」が用いられるということである。

## 2.2 菊地（2000）における「らしい」と「ようだ」

菊地（2000）は、ヨウダとラシイの意味について、「X ヨウダ：直接観察（体験）したところ、はっきりとはわからないが、X という様子だ。[判断材料は、ある対象についての観察（体験）。観察（体験）に密着した一体のものとして判断内容を提示する。判断内容、その観察対象の様子に関すること]」と述べている。

X ラシイ：観察したことに推論を加えると（または、伝聞したことに、その確からしさについての判断を加えると）、はっきりとはわからないが、X と判断される。[判断材料は、観察プラス推論、あるいは伝聞したこと。推論や伝聞というプロセスが加わるので、観察対象（あるいは、伝聞した素材）とはいわば距離を置いたものとして判断内容を提示する。判断内容は、その時点でその対象（観察対象と同じとは限らない）がそなえている性質・状況。狭い意味での「様子」に限らない]

また、ヨウダとラシイの意味・用法の使い分けについては、以下のように述べている。

- [A] 直接観察（体験）し、推論を加える余地なく、観察（体験）に密着した一体のものとして観察対象の様子を述べてる場合は、ヨウダを使い、ラシイは使わない。（話し手自身がその視覚・聴覚などの感覚によって直接観察し、観察対象の様子を述べている。）
- [B] 「直接の観察に密着して対象の様子を述べる」わけではなく、推論を伴ったり伝聞に基づいたりして判断内容を述べる場合は、ラシイを使い、ヨウダは使わない。（内容的に話し手自身が経験したり真偽を確かめたりできないことについて〈然るべき人がいうのだから信じてよかろう〉と判断して採用する。）
- [C] 〈観察に密着してその様子が見つとれる〉とも、〈観察に推論を加えた結果そう判断される〉とも、両様に捉える場合は、ヨウダもラシイもつかえる。（ヨウダの場合は、観察・直感されるという述べかたなので、その感覚が共有できない聞き手は、相手の感覚の当否を「ほんと？」と

問うことになるが、ラシイの場合は、推論を行っての判断なので、その判断をいぶかる聞手は、どういう推論をしているのか（＝「どうして？」）と尋ねることもできるわけである。）

- [D] 観察対象に密着して判断内容（＝様子）が述べられる（と捉えられる）場合はヨウダ、観察から距離を置いて（推論を介在させ、あるいはそもそも観察〈情報の入手〉が伝聞に基づいて行われ）判断内容を述べる場合を述べる場合はラシイを使う。
- [E（＝Dの略述バージョン1）] 〈観察との密着〉性や〈様子の描写〉性が強いほどヨウダが好まれ、〈推論〉性が強いほどラシイが好まれる。
- [F（＝Dの略述バージョン2）] 観察対象に密着して判断内容を述べる場合はヨウダ、観察からの距離を置いて（推論か伝聞に基づき）判断内容を述べる場合はラシイ。（〈観察対象と判断内容の距離〉が近いと捉えればヨウダ、遠いと捉えればラシイ。）
- [G] 〈観察に密着して様子を判断する〉とも〈推論を加えて判断する〉とも、どちらとも捉えれそうな場合でも、その観察・判断する活動が聞手にも容易に共有できる場合は、〈密着〉型の視点をとってヨウダを使うのが自然である。

### 2.3 先行研究の問題点について

これらの先行研究は、話し手との事態の心理的距離（「ひきよせ」の態度をとる場合は「ようだ」、「ひきはなし」の態度をとる場合は「らしい」）（早津 1988）や、観察対象と判断内容の距離（近い捉えればヨウダ、遠いと捉えればラシイ。）（菊地 2000）の相違を明らかにしたが、「ようだ」と「らしい」は、話し手の立場、人間関係などによって同じ話内容であっても、異なる意味として伝わる点がある点を詳しく論じていない。

また、早津（1988）は、「判断に対する責任の所在をはっきりさせないためや責任を回避するために『らしい』が用いられることがある。」という観点に疑義があり、検討する必要があると考える。

## 3 「らしい」について

### (1) (コンビニで店員と常連さんの会話)

店員：いらっしゃいませ。

常連：今日は暑いね。

店員：そうですね。でも、木曜日から二日間雨ですよ。

常連：木曜日雨が降るの。

店員：携帯の天気予報によると、今週の木曜と金曜は雨が降るらしい。

常連：変なお天気。

店員：雨が降ると、また気温が下がったりするから、体に気を付けてくださいね。

常連：ありがとう。 (実例)

## (2) (会社で社員と部長の会話)

部長：Aさんは？

B：業務に行ったらしいです。

部長：じゃ、この資料をコピーして。 (作例)

以上のように、「らしい」の伝聞・推量を表す形式は、日常会話において頻繁に用いられる。常連の「木曜日雨が降るの。」という情報確認に対して、店員は「携帯の天気予報によると、今週の木曜と金曜は雨が降るらしい」という他から得た情報を信頼する形にした。しかし、店員は「木曜日から二日間雨ですよ。」という発言の後、「らしい」の伝聞・推量を表す形式を用い、「雨が降る」という確信度を高めるよりも、自分の発言に対する責任を避けようとするのが聞き手に強く感じられるだろう。

また、用例2のAさんは「業務に行ったらしいです」に対して、聞き手から考えると、「らしい」の伝聞・推量を表す形式を使っているに過ぎない。しかし話し手から考えると、以下の場面が推測できる。

### 場面1

Aさんは、業務用の資料を片付け、持って行った姿を見た。

### 場面2

「Aさんは業務に行った」と他の人から聞いた。

### 場面3

Aさんは、Bさんに「業務に行ってきます。」と言った。

### 場面4

Aさんは、Bさんに「ちょっと急用ができちゃって、さきに帰るよ。部長は何か聞かれたら、業務に行ったって、頼む。」とお願いした。

場面1と場面2は、自分の観察からの推量であり、他人から得た情報であるので、確かなことかどうかに対して自信がなく、断言できないと考えられる。場面

3と場面4は、Aさんから直接的な情報を得たが、断定を避けようとするということが捉えられる。話し手は判断の対象となる事柄について断定的な言い方をせず、何らかのことに配慮し、責任を避けるようとする意識があるので、「らしい」を用いられると考えられる。つまり、会話において、「らしい」を用いるのは、話し手が自分の発言に対する責任を回避する意図を持っているからである。

そして、「ようだ」は話し手の何らかの配慮が働いたため、断定を避ける場合にも用いられる。自分の発言に対する責任を回避しようとする意図が働いた結果であり、相手の心情や立場に対する配慮の結果と解することができる。(『文法Ⅱ(改訂版)』<sup>註5</sup> 1993)

本章では、話し手の立場、人間関係に着目し、「回避」の観点に基づいて、話し内容を通して「らしい」の責任回避と「ようだ」の断定回避の用法を明らかにする。

### 3.1 責任回避用法

#### (3) (寿司作業場での会話)

小林 「おはようございます。」

周 「おはようございます。」

小林 「イン君みました？」

周 「イン君、今日休みだよ。」

小林 「イン君こないの？朝、マネージャーは、イン君がチラシで、終わったら、寿司に入るって。」

周 「イン君、今日来ないよ！」

小林 「じゃ、チラシって、だれがやるの？」

周 「市川さんじゃない？きのう、マネージャーはそういう話がしたけど。」

小林 「そうなの？」

周 「うん。じゃ、市川さんはチラシが終わったら、寿司に入るってこと？」

小林 「そうですね。」

(市川さんが来た。)

周 「市川さん、チラシが終わったら、寿司だって。」

市川 「えっ、寿司でいいの？」

周 「うん、寿司らしいよ！ねえ、小林さん。」

小林 「うん、そうみたい。」

(実例)

用例(1)と同じように、市川さんの「寿司でいいの?」という情報確認の質問に対して、周は「寿司らしいよ!」という「らしい」の伝聞・推量を表す形式にした。小林と周の会話から、「市川さんはチラシが終わったら、寿司に入る」というマネージャーの指示があるのに、断定をせず、また、「ねえ、小林さん。」と小林に断定をさせようとする行動は、話し手が何らかの配慮をして、自分の責任を避けようという意識からだと考えられる。

(4) 編集室で私はさりげなく大宮に話しかけた。

「最近の医学によると、男で同性的傾向のあるもの指の爪は、細長いということがわかったらしいね」

大宮、答えて曰く、

「そうですね。週刊誌でばくもその記事はよみました」

(『ことばの意味3』1982: p.89:6)

(5) (ミーティング後の会話)

A: 今日からマネージャーが一週間休みだって? (ミーティングの時、マネージャーが言った)

B: リフレッシュらしいね。

A: うん。一週間、静かでいいね。

(実例)

用例(4)は、柴田(1982)により、「これは深窓のお嬢さんたちにデタラメな話を信じ込ませようと、中年男がいたずら心から出たお芝居を描いたとのことである。だから、ここが「ようだね」になったのでは、この話にこめられている〈事態〉と〈話者との心理的距離が近く〉なりすぎて、発言に責任を持たなくてはならなくなってしまうのである」と説明されているが、本研究では、〈事態〉と〈話者との心理的距離〉が〈近い〉かどうかを考えず、単純に「医学による」という「らしい」の伝聞意味を用いることで、話し手は自分が「言った」「考えた」でないことを強調していると考えられる。したがって、話し手が発言に責任がないと理解させ、責任を回避しようとしていることを示している。

同じように、用例(5)では、話し手も聞き手もミーティングに出席したのに、わざわざ「リフレッシュらしいね」という「らしい」の伝聞意味を用いた。話し手が最も伝えたいのは、「マネージャーがリフレッシュで一週間いない」ということではなく、「これはマネージャーが言ったことなので、何か間違ったら、自分には責任がない」と解釈できる。つまり、話し手が発言の責任を回避しているのである。

- (6) (自分の抱いた)感情は確かに単純かつ幼稚であり、それ以上に危険なものであるが、ある種の日本人は、はじめて外国に出ると、とかくこうした傾向に陥りやすいらしい。

(早津1988:55:29)

早津(1988)は、「自分の抱いた感情等をより普遍的なものとしてとらえようとする意識がはたらくばあいにも『らしい』が用いられる。」と述べ、「自分の感情を、自分だけのごく個人的な物ではなく、日本人一般的が抱きやすい感情なのだ」と捉えようとしているのである。」と解釈した。本研究では、自分を「ごく個人的な物」だと思われる恐れがあるので、「ある種の日本人は、……らしい」という「らしい」の伝聞・推量を表す形式によって、他から得た情報に基づく判断とすることで、「自分が特別ではない」という普遍性を強調することができ、自分の発言に対する責任を回避することもできると考える。

### 3.2 人間関係を維持する用法

- (7) 「あまり売れないから、午前中そんないっぱい作らなくていいらしいよ。  
休憩はいていいよ。」

(実例)

「13時に休憩入るから、もうちょっとつくりますから」(時計を見て、まだ12時です。)

「そうじゃなくて、もういっぱいあるから、売れなくて、色が変わるから。」

- (7') 「あまり売れないから、午前中そんないっぱい作らなくていいらしいよ。  
休憩はいていいよ。」

「13時に休憩入るから、もうちょっとつくりますから」(時計を見て、まだ12時です。)

「そうじゃなくて、もういっぱいあるから、売れなくて、色が変わるから。」

- (8) 「衛生検査が始まってるらしいから、袋に日付を書いてくださいね。」  
「はい、分かりました。」

(実例)

- (8') 「衛生検査が始まってるらしいから、袋に日付を書いてくださいね。」  
「はい、分かりました。」

用例(7)、(8)は仕事の仲間であり、仕事に対する場面である。直接「午前中そんないっぱい作らなくていいよ」、「衛生検査が始まってるから、袋に日付を書いてくださいね。」ということになると、対等関係の相手に偉そうなイメージ

をさせやすく、相手に違和感を持たせる可能性があるからという配慮が感じられる。それは、「らしい」の伝聞・推量を表す形式を用い、他人から聞いた話や他から得た情報に基づく判断により、自分の発言に対する責任を回避するのに加えて、職場の人間関係を維持するため、言い方を柔らかにし、努力していることが考えられる。

(9) (従業員は連絡がなく、欠勤という会話)

周 「マネジャー、インちゃんは今日休みですか。」  
マネジャー「わからない、おれも今インちゃんいないなぁ～って気づいたの。」  
周 「先週が留学生試験だったらしいけど……」  
マネジャー「今日はまだ何も連絡が来てなくて」  
(しばらくして、欠勤の従業員は連絡が来た)  
マネジャー「インちゃんのお姉さんは出産したって連絡が来たよ。」  
周 「そうか、確かに、お姉さんがそろそろ出産の予定日になるって。」  
(実例)

これは、話し手が、上司と仕事の同僚の無断欠勤について話す場面である。話し手は「先週が留学生試験らしい」という仕事の同僚が「先週」欠勤する理由を取り上げ、「らしい」の伝聞・推量を表す形式を用い、自分の発言に対する責任を回避しているに過ぎないと考えられる。しかし、「今週」の無断欠勤において、「先週」の欠勤理由を取り出し、仕事の同僚を守りたいので、「インちゃんは、勝手に休みする人でなく、ちゃんと何らかの理由があるから」と聞き手に合図をさせる気持ちが強く、「けど」を付けることで、「らしい」の人間関係を維持する機能を実現したと考えられる。つまり、例文の人間関係において、「らしい」の伝聞・推量を表す形式は、自分の発言の責任を回避するだけでなく、「けど」を付けることを通して、自分側の「インちゃん」(対等関係)と上司の間に人間関係を柔らかくにすることができたと理解できる。

また、早津(1988)により、「子供の育て方について異なる考え方を持つ嫁と姑がいるとする。この若い嫁は、子供は薄着で育てるべきだという育児観を持っており、その点で姑と意見が合わない。この二人の間で次のようやりとりがあるかもしれない。

(10) 姑 「そんなに薄着では寒くてかわいそうじゃないか。もっと着せてやりなさい。」  
嫁 「でも、あまり厚着をさせると汗をかいたり動きにくかったりでか

えってよくないらしいですよ。」

姑の忠告に反する自分の意見を述べる際に、例のように「らしい」を用いて表現すれば、自分自身の判断であるという感じが和らぎ、姑との間に摩擦が生じるのを避けることができる。ところが「よくないですよ」と表現すると、嫁の（自信のある）判断だという感じになり姑との間が険悪になりかねない。」と説明した。

本研究では、姑と嫁という特殊な関係において、「らしい」を用いた表現は、責任を回避するより、「姑の子育て方がよくない」「自分の子育てかたて行きたい」という直接衝突を避け、人間関係の良い環境を維持するため、聞き手に配慮しながら、柔らかい言い方で、違和感を与えるのを避けることによって、摩擦を避けることになるを考える。嫁が自分の考えをはっきり表しているので、「らしい」を通じて、摩擦が生じるのを避けることによって、嫁は、姑との関係を壊したくないことに努力していると捉えられるだろう。つまり、自分の発言に対する責任を回避することより、人間関係を壊さないことのほうが重要なのである。

### 3.3 まとめ

「らしい」の責任回避用法では、話し手が責任回避していることに関しては、話し手だけが知っていることである。聞き手側は「らしい」の伝聞・推量の意味として捉えられ、話し手の情報に対して、その真偽を自身で確かめることをせず、情報を受け取るだけの働きしか持たないと考えられる。

また、「らしい」の責任回避から、人間関係を維持する用法が派生した。場面により、「らしい」の働きの強さが違ってくる。例えば、仕事の同僚の間において、「らしい」だけを用いることによって、言い方を柔らかくすることで、自分にかかわる職場の人間関係を維持することができると考えられる。

伝聞・推量 → 責任回避用法 → 人間関係を維持する用法

しかし、上司と仕事の同僚の出来事について話す場面において、「らしい」の人間関係を維持するという働きが弱まることによって、責任回避法の働きが強くなってしまい、同僚を守り、同僚と上司の関係を維持するため、別の要素（「けど」）を追加しなければならない場合もある。

姑と嫁との関係は、夫のお母さんという上下関係でも考えられ、家族という対等関係でも考えられるが、血が繋がってなく、お互い直接衝突を避け、摩擦を生じることを避けることに気を付けるという特殊な関係である。このような特殊な人間関係において、「らしい」の伝聞・推量を表す形式を用いるのは、自分の

考えを相手に伝聞・推量の意味として取らせることで、直接衝突や摩擦などを避けることが実現でき、さらに発言に対する責任を回避することで、人間関係を壊さないようにするのが目的である点を重視しているからであると考えられるのである。

## 4 「ようだ」について

「らしい」は、伝聞・推量を表す形式を用い、人間関係や場面により、責任回避用法から人間関係を維持する用法が派生したことを明らかにした。「『ようだ』は、基本的に、話し手が観察によってその事態を捉えているということを表す。認識のモダリティに関わる用法としては、話し手が観察したことそのものを述べる用法と、話し手が観察したことに基づいてであることを推定する用法とがある。認識のモダリティの形式としての『ようだ』の中心的な用法であるが、派生的な用法として、婉曲用法がある。」(『現代日本語文法 第8部 モダリティ』2003)

そして、「ようだ」は話し手の何らかの配慮が働いたため、断定回避を通し、自分の発言に責任回避したり、相手の心情や立場に対する配慮したりする場合が用いられる。(国際交流基金1995)

本研究では、人間関係や場面において、「ようだ」の「話し手の何らかの配慮」を分析したうえで、断定回避を通し、結果的に責任回避と人間関係を維持することが実現できることを明らかにする。

### 4.1 結果的責任回避用法

#### (11) (ナショナリズムと愛国心)

ル・グレジオ (略) 日本は、朝鮮、中国の一部、インドシナ、タイやカンボジアまで植民地化しました。当時の日本はヨーロッパ列強の競争相手でした。ただし、戦後の脱植民地化をめぐるには、日本はヨーロッパが直面したような問題にはぶつかなかったのかもしれませんが。

中 地 地域によって関係は違ったようです。朝鮮、中国との関係は明らかに否定的な要素が強かったのですが、台湾の場合はかなり違って、友好的な面もあったようです。

(『早稲田文学 2016年春号』p.184)

(12) 三村 (略) 大竹さんは、風景の写真集を眺めるのが好きで、気に入った写真集を書店で見つける度に購入しているのだという。今回セレクトした『感動の世界遺産ベストセレクション120』は、相当

なお気に入りのようだ。

大竹 「三村さんのセレクトと比べるとなんだちょっと恥ずかしいんですけど、好きなんですよね、こういう写真集が。一言に“世界遺産”といっても、遺跡、景観、自然などがあるのですが、中でも俺は建築物が好き。この本には、建築物のいい写真がたくさん載っています。」

(『ダ・ヴィンチ① 2016』 p.11)

用例(11)は、話し手にも聞き手にも関わる内容ではなく、「植民地化」などに関する話題である。この場合の「ようだ」は、基本的な推量の意味にすぎない。しかし、用例(12)に対して、撮影者である大竹の話であり、話し手は撮影者本人に「今回セレクトした『感動の世界遺産ベストセレクション120』は、相当なお気に入り」という自分の判断を伝えるとき、自分の判断に自信がなく、意識的で断定を避けようと、自分の発言に対する責任を回避しようとする意図が感じられる。

(13) 今日は、あの店は休業のようです。

(13') 今日は、あの店は休業です。

同じように、用例(13)は話し手が自分の判断に自信がなく、断定回避の言い方を用い、自分の発言に対する責任を回避しようとしていると捉えられる。

用例(12)、(13)は、「ようだ」を用いることによって、断定を避けることができるうえ、自分の発言に対する責任を回避するという結果的責任回避が実現できると考えられる。

#### 4.2 人間関係を維持する用法

(14) 君には無理なようだから、だれかに代わってもらおう。

(14') 君には無理だから、だれかに代わってもらおう。

(『文法Ⅱ改訂版』1995: p.197)

(15) どうも、あなたのおっしゃっていることは、私には理解できないようです。

(『現代日本語文法 第8部 モダリティ』2003: p.165)

用例(14')では、相手に直接「君にむりだから」と言い出すと、相手に傷を付け、人間関係が壊される恐れがあると考えられる。用例(14)のように、「ようだ」を用い、「君には無理なようだから」という言い方が一般的であり、話し

手が「相手に傷を付けないように」と相手の気持ちを配慮することになり、人間関係を維持することが目的になっていると感じられる。

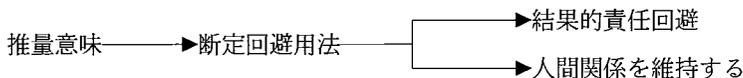
用例(15)は、話し手自身のことであり、自分がよくわかるはずなのに、「私には理解できない」と直接的な発言をせず、「ようだ」を用い、「相手に傷を付けないように」という配慮があると感じられる。「私には理解できないようです」という言い方を通し、相手に傷を付けず、人間関係を維持することができると考えられる。

#### 4.3 まとめ

「ようだ」は、話し手が聞き手に向かって話すとき、回避用法として働き、二つの用法があると考えられる。一つは、話し手が自分の判断に対する自信がなく、断定回避の言い方を用い、自分の発言に対する責任を回避する目的である。もう一つは、話し手が相手の気持ちや立場を配慮し、「相手に傷をつけないように」と考え、人間関係を壊さないように、関係を維持する目的である。

話し手の断定回避用法を通し、結果的責任回避に至ることに関しては、従来の先行研究と一致したが、相手の気持ちや立場を配慮し、人間関係を維持する目的に関しては、従来の先行研究では「相手の心情や立場に対する配慮の結果と解することができる」(『文法Ⅱ改訂版』1995)「認識のモダリティの形式としての「ようだ」の中心的な用法であるが、派生的な用法として、婉曲用法がある。」と述べている。

本研究では、「ようだ」の回避用法について、基本的な推量の意味から派生したものである断定回避と定義する。そして、断定回避用法から結果的責任回避と人間関係を維持するというものが派生したと考えた。以下の図になる。



## 5 「らしい」と「ようだ」

早津(1988)は、『らしい』と『ようだ』の意味的な違いについての説明は大きく二つのタイプに分けられる。大まかに言うならば、『主観』・『客観』という概念を用いた説明と、『発話主体』と『事態』との心理的距離を考慮に入れた説明とである。」と述べている。

また、泉原(2007)は、「B+ようだ」と「B+らしい」に互換性のある場合の違いは、次のようになっている。

B+ようだ：B に対する「主観的推論/感覚的印象/感情を反映した顔/動揺」

B+らしい：B に対する「客観的推論/感覚的評価/ポーカフェイス/冷静」

確かに、「赤ちゃん、眠っているようだ」という用例に対して、話し手の「やすらぎと安心」といった気持を表し、表情にも態度にも、感情が表れている響きになるが、これを「～らしい」に置き換えると感情が消えてしまい、抑えられているような「冷淡/よそよそしい/すべてを見通している」印象にかわってしまう（泉原 2007）と感ぜられる。

そして、話し手の立場により、「らしい」を用いることが不適切な場合もある。

(17) (首相の発言)

× 政府の景気対策には反省すべき点があるらしい。

○ 政府の景気対策には反省すべき点があるようだ。 (菊地2000: p.53)

(18) (医者が患者に)

× 胃が弱っているらしいです。この薬を飲んでください。

○ 胃が弱っているようです。この薬を飲んでください。 (庵2012: p.132)

以上のように、首相、医者という自分の発言に対する責任を持たなければならない立場において、「らしい」が用いられることで、突き放した、無責任なニュアンス・印象を帯びやすい。(庵 2012、菊地 2000)

また、菊地 (2000) は、「〈観察対象と判断内容の距離〉をもっと近づけて捉えうるはずの(またそう努めるべき)立場の人が、そうせずに、距離を置いて『Xらしい』という判断を示すことが、不誠実な印象を与える」と述べている。

本研究では、「らしい」の責任回避用法を基づいて、首相、医者という立場の人間は自分の発言に対して、責任を持たなければならない規則があり、「らしい」の責任回避用法はあり得ない。むしろ、特定の立場の人間に限らず、話し手は責任を持って発言しなければならない場面に応じて、「らしい」の責任回避用法は見られないはずである。

そして、人間関係によっては、「らしい」と「ようだ」が交換できない場合もある。

(19) 友だちに向かって、あんなひどいことを言っただけに、さすがに後悔しているらしいな。

(19') 友だちに向かって、あんなひどいことを言っただけに、さすがに後悔しているようだな。 (泉原2007: p.931)

以上の用例に対して、人間関係によっては、「らしい」が使えない場合がある。泉原（2007）は話し手と聞き手が親子という関係である場合は、直接「後悔しているらしいな」と話しかけるとおそらく息子は気分を悪くしてしまう。二人が対等の立場にあると、最悪の場合、けんかになる可能性があると述べている。

本研究では、親子や親友という身内の関係においてこそ、関心を持たず、「らしい」の責任回避用法が不適切になると感じられる。つまり、親や親友は内側の人間という特定の立場の人間であると思われ、首相や医者と同じような立場と考えられる。しかし、首相や医者と違うのは、発言に対する責任ではなく、感情が込められているかどうか、そして、共感できるかどうかが重視されていると考えられる。

リグス（2007）は、話者の推量が外界に存在する具体的な情報源を基にしているか、あるいはそういうものには拠らずに自身の経験的な知識に基づいて判断しているか、という対立で捉えている。

ラシイ：推量はある具体的な情報を基にしている、強く押し出したい

ヨウダ：推量はある具体的な情報を基にしているが、あまり強調しない

(20) 実際の宗教的な行事として、このころの天皇は、稲のみのりの豊になることや、ひでりに雨のふることなどを神に祈る役目をもっていたらしい。  
新嘗まつりをおこなうことも天皇の仕事であったようだ。

（リグス2007）

「ラシイ命題に読者の注意を促す信号であるからラシイがここで使われているのは理にかなっている。係助詞『も』に伴われているのも、この情報が1番目でないことを示す。2番目には強調度のトーンを下げるヨウダがふさわしい。」  
（リグス2007）

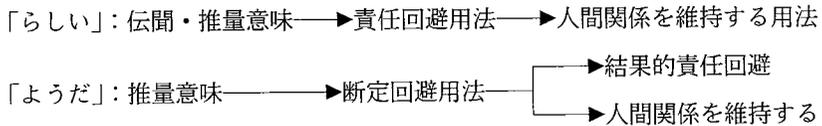
本研究では、「らしい」の責任回避用法では、リグス（2007）の「ある具体的な情報を基づいて」と違い、聞き手に「ある具体的な情報を基づいて」の発言であると理解させ、情報の真偽については、話し手しか分からず、重視されていないと考える。また、「らしい」は「強く押ししたい」という機能があり、聞き手に「ある具体的な情報を基づいて」という注意を促す信号を強く出すことによって、話し手が責任回避を実現することができると感じられる。

「ようだ」の断定回避は、自分の配慮及び相手に配慮することに基づき、発話内容をはっきりせず、はっきり言えず、「あまり強調しない」という機能として働くことができる。従って、「ようだ」の責任回避用法は、「らしい」の責任回避

用法と違い、直接実現できず、断定回避を通し、結果的に責任回避用法が実現できるのである。

## 6 おわりに

日常会話の人間関係や場面において、「らしい」は伝聞・推量を表す形式を用い、「強く押したい」という機能があることに基づき、基本的な伝聞・推量意味から、責任回避用法という働きが派生した。また、責任回避用法から、人間関係を維持する用法が派生した。「ようだ」は、「あまり強調しない」ということに基づき、基本的な推量意味から、「話し手が何らかの配慮」に断定回避用法が派生し、断定回避用法を通し、結果的に責任回避と人間関係を維持することを実現できることが明らかになった。



また、首相、医者のような自分の発言に対する責任を持たなければならない立場において、「らしい」を用いることで、突き放した、無責任なニュアンス・印象が帯びやすい（庵 2012、菊地 2000）という観点に対して、特定の立場の人間に限らず、特定の場面（インタビュー、作品の評論など）において、話し手が責任をもって発言しなければならない場合、「らしい」と「ようだ」は交換できず、「ようだ」を用いるべきだと論じた。

本研究では、「らしい」と「ようだ」についての研究であるが、同じような責任回避の働きを持っている「ばい」との相違について、詳しく考察する必要があると思われる。今後の課題としたい。

### 注

注1 国際交流基金（1993）『教師用日本語教育ハンドブック④文法Ⅱ（改訂版）』を参考した。

注2 リグス秀美（2007）は、「ラシイ：推量はある具体的な情報をもとにしていて、強く押したい」と述べた。

注3 リグス秀美（2007）は、「ヨウダ：推量はある具体的な情報をもとにしているが、あまり強調しない」と述べた。

注4 『文法Ⅱ（改訂版）』（1995）では、断定にかなり近い判断だとすることに

より、「らしい」の形による判断を「推量」とせず、「推定」と呼ぶ向きがある。本研究では、「断定に近い判断」とするかどうかに関係なく、「らしい」の基本的な意味である「推量」を用いる。

注5 本研究では、国際交流基金（1993）『教師用日本語教育ハンドブック④文法Ⅱ（改訂版）』を『文法Ⅱ（改訂版）』にした。

#### 参考文献

- 庵功雄（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 泉原省二（2007）『日本語類義表現使い分け辞典』研究社
- 菊地康人（2000）「『ようだ』と『らしい』—『そうだ』『だろう』との比較も含めて—」『国語学』第51巻1号
- 国際交流基金（1993）『教師用日本語教育ハンドブック④文法Ⅱ（改訂版）』凡人社
- 柴田武（1982）「ヨウダ・ラシイ・ダロウ」『ことばの意味3』平凡社
- 早津恵美子（1988）「『らしい』と『ようだ』」『日本語学』7巻4号（4月号）
- 日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法 第8部 モダリティ』くろしお出版
- 宮崎和人 [ほか]（2002）『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
- リグス秀美（2007）「推量の助動詞ソウ、ミタイ、ダロウ、ラシイ、ヨウダの構造」『言語学と日本語教育v』くろしお出版

#### 用例出典

- 庵功雄（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 泉原省二（2007）『日本語類義表現使い分け辞典』研究社
- 関口靖彦（2016）「さまぁ〜ず」『ダ・ヴィンチ1月号』KADOKAWA
- 国際交流基金（1993）『教師用日本語教育ハンドブック④文法Ⅱ（改訂版）』凡人社
- 柴田武（1982）「ヨウダ・ラシイ・ダロウ」『ことばの意味3』平凡社
- 日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法 第8部 モダリティ』くろしお出版
- リグス秀美（2007）「推量の助動詞ソウ、ミタイ、ダロウ、ラシイ、ヨウダの構造」『言語学と日本語教育v』くろしお出版
- 早稲田文学会（2016）「対談 冬の陽ざしのなかで J・M・G・ル・グレジオ×

